2 胸部画像診断（CTを含む）

北里大学医学部救命救急医学

相馬　一亥

呼吸器疾患の診断に胸部X線写真は現病歴，現症とともに必須の検査である。また救急，集中治療領域では呼吸系のモニタとしてパルスオキシメーターとともにバイタルサインの一つとして位置づけされる。加えて呼吸療法の分野では肺理学療法の積極的な施行の決定，その効果を評価する上できわめて客観的な手段となる。胸部画像診断の進歩には目を見張るものがあるが，本教育講演では胸部画像診断として胸部単純X線写真を中心に診断，モニタとしての意義，治療面での応用を述べたい。

胸部X線写真からの情報を最大限に得るためにはいわゆる適切な条件で，正面から撮影されていることが重要である。この目的のためには立位正面写真が理想であるが，救急・集中治療領域では種々の制約から不可能なことが多く，臥位正面写真となり，これによる修飾因子を念頭において読影せざるを得ず，結果的に読みすぎ，見落としに陥る危険性がある。そして診断，治療方針が変更されることもあるが，可能な限りこのような事態は回避しなければならない。最も確実な方策は呼吸療法のチーム医療として放射線科医の参加が理想といえる。読影では経験的読影ではなく，理論的な読影を行うべきであり，さらに比較読影が重要である。理論的読影とは解剖学的な知識の修得，異常陰影が正常構造に与える影響を把握することである。比較読影は以前の胸部X線写真と比較することで変化を的確に捉え，診断をより確実にするための手段として重要である。さらに胸部X線写真の限界を認識し，呼吸管理上必要と判断され，より高度の画像診断（胸部CTなど）が必要であればそれに伴う危険性を考慮して施行を決定する。胸部CTはヘリカルCTの普及によって以前とは比較にならないほど精度は向上している。目的を明確にして行うことが何より大切であることを銘記したい。